論 文

男性対象のジェンダー講座の現状と課題

伊藤（いとう） 公雄（きみお）

＜キーワード＞
男性セミナー、男性学、＜男らしさ＞、ジェンダー、男女共同参画社会、

＜要　旨＞

男女共同参画社会の実現のためには、女性の意識変革や社会参加の拡大と同時に、男性の意識変革と生活スタイルの変革が必要である。こうした視点から、近年、各地の女性センターなどでも男性を対象にした講座が増加している。しかし、男性対象の女性学・ジェンダー論の講座は、企画段階でのプログラム作成のむずかしさ、（惹句も含めた）募集方法、開催時間の考慮など、さまざまな工夫が求められる。本稿は、男性を対象にした各地のジェンダー関連講座の実態を概観した上で、今後の課題について論じたものである。

従来、男性が、女性学・ジェンダー論にいだく印象は、「自分たち（男）の問題ではない」というのがまだまだ一般的である。また、男性を対象にしたジェンダー講座では、男性が陥りやすい「男女の特性論」や「生物学的性差とジェンダーの混同」を解きほぐすことや、逆に、女性の妊娠・出産などの生理的機能を無視した「男女の機械的平等」論の過ちについても、うまく伝える必要があると思われる。

講座のもち方にも工夫が必要である。ともすれば、＜男らしさ＞の鎧にしばられて他者とコミュニケーションすることが苦手になりがちな男性には、「男女の役割逆転のロールプレイ」や「雑誌のジェンダー分析」、「男の自立度チェック表」などを用いたワークショップを取り入れるのも効果的だろう。また、男性同士の話し合いの時間や、ときには、男女混合でのテーマを設定しての話し合い（「男が得か女が得か」「＜男らしさ＞とは何か」など）をするのも有意義だろう。

さらに、料理講座・子育て講座・介護講座など、実体験を通じた意識変革は、男性を対象にした講座においては今後とも積極的に取り入れるべきであろう。

はじめに　女性問題は男性問題?

90年代に入って以後、女性政策の現場から、「女性問題は男性問題だ」という声が広がりつつある。この声の広がりの背景には、各地の女性センターや女性政策の場で、この言葉を繰り返し語ってきた筆者個人の果たした役割も大きかったのだろうと思う。その意味で、個人的な責任があるといってもいい。ここで、本稿の中心テーマでもある男性対象セミナーとも深くかかわる、このスローガンをめぐる問題について、少し考えてみたい。

この言い方を、意識的に使用するようになったのは、たぶん1993~4年頃のことだったと思う。実は、それ以前は、個人的にこの言葉には、強い違和感をもっていた。90年代初頭、筆者の行った講演について、「講師は、女性問題は男性問題であると鋭く指摘した」というような新聞記事が出たことがある。そのとき感じたのは、「こんなとらえ方は講演の趣旨として間違っているし、危険だ」という印象だった。というのも、「女性問題と男性問題は、単にメダルの表裏ではない」という思いがあったからだ。もちろん、その背景に、こんなことを言ったことにされてしまうと、身近にいるフェミニストたちから「女性問題を男性問題と単純につなげる発想は、女性問題の重要性をないがしろにするものだ」という批判の声が起こるということを十分に認識していたからでもある(現実に、当時、そうした声があった)。

ただし、今からふりかえって見ると、この違和感の背景には、女性の側からの反発への忌避とともに、男性問題の「発見」にともなう、この問題への筆者なりのこだわりもあったのだとも思うのである。<男らしさ>というジェンダーの縛りのなかで男性がかかえてこんできた問題としての「男性問題」の固有性を、今後ははっきりと位置付けていかなければならない(それが筆者の任務だ)という、いささ

か思い上がった判断もあったのだろうと思う。確かに、こう考えると、女性が女性であるがゆえに差別され社会的に排除されてきた問題としての「女性問題」と、「男性問題」とは、それぞれの固有の問題があり、必ずしもメダルの裏表ではない。明らかに「女性問題」は「男性問題」ではないのだ。また、この提示の仕方が、夫婦関係や家庭の内部の問題として問題の所在をとらえられやすいという問題点もあったと思う。

しかし、すでに述べたように1993年以後、筆者自身、この言葉を積極的に用いるようになった。ただし、この「女性問題は男性問題だ」は、前述のような「女性問題」「男性問題」それぞれの固有の問題性を前提とした上でのことだ。つまり、ここでいう「男性問題」はジェンダーの縛りによって男性がこうむっている諸問題ということではない。女性問題の解決のためには、男性の側の意識や生活スタイルの変革が必要だという意味合いに限定した用語として理解していただきたいのである。簡単にいえば、「女性問題の解決は、女性だけの意識変革や社会参加の拡大だけでは進まない、男性社会の担い手である男性の生き方・働き方もまた問題にしなければならない」ということが意味したいのだ。もちろん、このことは、夫婦や家庭生活にとどまらない広がりをもっている。それはジェンダー化された社会構造そのものの根本的な問い直しを含む問題だからである。ここで「女性問題は男性問題だ」というスローガンの意味するところをまとめていえば、「(ジェンダー化された社会・性差別社会のなかで生じた)女性問題」の解決には「男性(の意識改革・生活スタイルの改革を含む、男性主導社会の変革の)問題」である、ということにほかならないのだ。

現在、多くの場所で語られている「女性問題は男性問題だ」という声の多くは、こうした視点からのものであろう。女性問題の解決には女性だけでなく男性の意識変革が問題だ、というこの判断が、各地の女性センターや女性政策において、男性の意識啓発や男性の生活スタイル変革を、重要な課題として浮上させているはずだからだ。

こうした動きを背景に、男性を対象とした女性学やジェンダー問題をめぐるセミナーや講座が設置されることは今や、珍しくなくなりつつある。男性対象の女性問題やジェンダー論などの講座とともに、ストレートに男性の生き方を問いかける、男性学や男性論への関心も広がっている。

しかし、その一方で、男性を対象にしたジェンダー関連講座は、難しい問題点をかかえているのも事実である。というのも、男性自身が、この問題をまだまだ「自分の問題」として把握しきれていないからだ。本稿は、こうした男性対象の女性学・ジェンダー研究・男性学の講座の実態を概観するとともに、そこに見出されたいくつかの問題点を提示し、同時に、こうした問題解決のための工夫について論じてみようと思う。

男性対象のジェンダー講座の実態

まず、男性対象のセミナーの現状について概観しておこう。男性を対象にしたジェンダーに関する講座という点で、かなり早い段階で企画運営されたものに、1989年から「男性学」を開始した滋賀県立婦人センター（現「女性センター」）や日本青年館の「花婿講座」、杉並区の「Men 's 倶楽部」、1990年開始の東京都足立区の「男性改造講座」、などがあげられるだろう。1990年代の中期以後、大阪市の「男性リストラ講座」(クレオ大阪北、1994年)、「男性生活学講座」(大阪市立婦人会館、1994年)など、この流れは急速に拡大し、ほぼ日本全土でこうした男性対象の講座が開設されるようになっている。

福岡市女性センター「アミカス」の1995年度の調査（1993年4月1日から1995年7月31日に実施されたもの）によれば、男性の意識啓発をねらいとした事業は、全国で141団体、のべ実施回数が1,033回であったという。うち、男性のみを対象としたものが681回、対象を限定しないで男性が参加しているものが352回であったという。実施形態でもっとも多かったのが「実習等」で60%を越え、次いで「講座」27.7%、「講演・シンポジウム」4.9%、「座談会等」3.8%、「その他」3.2%だったという。

テーマについては、表1にみられるように、生活技術に関するものが多く、なかでも「食事」というのが目につく。とりあえずは、家事の入門として料理からという形が多いことを感じさせる。次いで「男性論・女性論」、「生き方」などが続いている。女性学講座などと比べると、「学習」よりも「実習」が多いということは、男性学や男性問題についての「話し手」の不足や、男性学・男性研究がいまだ十分に社会的に認知されていないこと、またその結果として研究者・話題提供者の数が少ないことなどの事情が原因になっているのだろう。

と同時に、男性を対象にしたジェンダー講座においては、「ジェンダー問題は自分たちの問題でもある」という「気づき」の部分で、男性の間に、まだまだ「ジェンダーなんて他人事」という認識が根強いこと、さらには、次に述べるように、「生物学的性差による決定論」的な傾向が身に染み付いてしまっていることがあるなど、総じて、男性に対して「ジェンダー問題を語る」ことの難しさが控えているのだろうと思われる。

男性対象講座のテーマ

表1

テーマ	福岡市内		福岡県内（福岡市を除く）		全国（福岡県を除く）		全体	
	回数	構成比	回数	構成比	回数	構成比	回数	構成比
生活技術	134	83.2%	291	76.4%	245	49.9%	670	64.9%
食	122	75.8%	247	64.8%	164	33.4%	533	51.6%
育児	8	5.0%	3	0.8%	16	3.3%	27	2.6%
介護	1	0.6%	8	2.1%	36	7.3%	45	4.4%
その他	0	0.0%	11	2.9%	9	1.8%	20	1.9%
パーティ	0	0.0%	18	4.7%	4	0.8%	22	2.1%
レクリエーション	3	1.9%	4	1.0%	16	3.3%	23	2.2%
家族	4	2.5%	3	0.8%	40	8.1%	47	4.5%
性・からだ	2	1.2%	1	0.3%	11	2.2%	14	1.4%
健康	2	1.2%	6	1.6%	7	1.4%	15	1.5%
男性論（学）・女性論（学）	8	5.0%	16	4.2%	75	15.3%	99	9.6%
歴史	1	0.6%	3	0.8%	0	0.0%	4	0.4%
社会・福祉	1	0.6%	2	0.5%	4	0.8%	7	0.7%
労働・職業	1	0.6%	2	0.5%	5	1.0%	8	0.8%
教育	1	0.6%	1	0.3%	7	1.4%	9	0.9%
政治・経済・法律	1	0.6%	7	1.8%	11	2.2%	19	1.8%
文化・教養	0	0.0%	34	8.9%	10	2.0%	44	4.3%
生き方	2	1.2%	9	2.4%	57	11.6%	68	6.6%
コミュニケーション	3	1.9%	5	1.3%	15	3.1%	23	2.2%
その他	1	0.6%	1	0.3%	4	0.8%	6	0.6%
合計	161		381		491		1,033	

ジェンダー問題への男性たちの鈍感さ

男性たちが女性学やジェンダー問題を考えるとき、一番のネックになるのは、「この問題は主に女性の問題であり、自分たち男性にとっては無関係な問題だ」という発想が男性の間に根強いことだろう。その意味で、「女性問題は男性問題だ」というスローガンは、ジェンダー・女性問題を男性たちの意識に届かせたいという、女性政策側の強い思いが反映されているともいえるだろう。

実際、大学などでの女性学・ジェンダー研究・男性学などの授業を担当すると、女子学生と男子学生の間にジェンダーとセックスをめぐる認識に大きな格差があることに気づかざるをえない。「ジェンダーは基本的にセックスに基礎づけられたものである」という認識が、男子学生は女子学生に比べてより強いのである。

筆者は、1992年、京都大学で「男性学」をテーマとした授業を始めることになった。それまで、自主ゼミ(とはいっても単位は認定される)形式で行われていた「女性学」のゼミに参加していた学生たちが、「男性問題」をやってみたいということで、筆者にお鉢がまわったのだ。ここで経験した男女学生のジェンダー問題に関する意識の格差についてちょっとふれてみたい。

<男らしさ>が歴史的・文化的にいかに構成されてきたか、男たちが、<男らしさ>によっていかに縛られているか、さらに、男たちが生み出してきた社会がはらむ問題とは何か、といったことを、男性の視点から解剖していこうというのがこの男性学の授業の目的といってもいいだろう。この授業、学生たちにはなかなか人気がある。教室もたいていギッシリ満員の状態である(京都大学では二年続けて、受講希望者が1700人にまでなり、1995年には受講希望者が2900人にもなった)。女子学生の参加者も多いが、半数以上が男子学生である。男性教師がジェンダー(文化的・社会的な性)について授業するというのが彼ら男子学生たちに一種の「安心感」(?)を与えたのだろうかとも思う。それとも、女性問題・男性問題を、自分の課題としてとらえ始めた男子学生が、「男性学」というテーマ設定に、積極的に反応したのだろうか。理由は今でもよくわからない。

授業を進める過程で、気になったことがある。他の授業では気にならないことだが、ことジェンダーをテーマとすると、男子学生と女子学生の間に、「性差」とでもいえるようなある種の反応の違いが見いだせるのだ。単純にいえば、男子学生の方が、性別役割をめぐる思い込みがきついのではないかという印象をしばしば抱かされるのである。この傾向は、特に新入生を見ていると、かなりはっきり見て取れる。

そのことはたとえば、新入生に女性問題・男性問題についてレポートを書かせてみるとよくわかる。こうした課題を与えられたとき、女子学生のレポートは、一言でいって多様

性がある。クールに男性たちを見つめる者があるかと思うと、鋭く男性社会を批判する者もいる。いずれにしても具体的な観点から、かなりつっこんだ問題意識がかいま見られることが多いのである。また、ラディカルな意見であれ、ときに保守的にみえる意見であれ、男性社会に対する自分なりの対応が表明されているのも女子学生のレポートの特徴だ。ところが、これが男子学生になると、たいていの場合、きわめて一般的かつワンパターンの返答が返ってくるのである。これまでの経験からいって、男子学生のレポートの七割ちかくが、大筋は次のような展開をたどることになる。

「僕は男女平等に賛成です。でも。男と女は生物学的に異なります。女は子どもを生みます。(ここからが特に問題なのだが)だから、子どもは(子育てに生物学的にもむいているはずの)女が育てる方がいいはずです。それゆえ、男が外で働き、女が家を守るというスタイルが『自然』だと思います。でも、これからは(女性たちがあれこれ声を上げ始めていることだし)社会は男女平等に向かって進まざるをえないでしょう」。

女子学生は、自分の問題としてこのジェンダーという課題と向き合っている。それに比べて、男子学生の方は、それなりの問題関心はもち始めたとはいっても、まだまだ、古い「男女性別役割分業意識」から抜け出していないのである。

女性問題・男性問題というと、なぜ、学生の間に男女でこんなに違いが生まれるのだろう。もちろん、小学校以後の学校教育が、こうしたジェンダー問題に注意を払ってこなかったことが、こうした男子学生のパターン化した反応の背景にはあるのだろう。しかし、それだけではないはずだ。というのも、女子学生たちは、それなりに自分の意見表明をしているのだから。たぶん、そこにはこんな理由があるのではないかと想像している。つまり、女子学生たちは、この男性中心社会のなかでこれまでさまざまなかたちで自分が「女」であることと向き合い、その矛盾やそれへの対応を迫られてきたのに、男性社会を前提にしてそれを「当然」のものと考えてきた男子学生たちは、そうした問題を、学校教育の場も含めて、自分の課題として考える機会がほとんどなかった、ということなのだろうと思われるのである。

学生ばかりではない、セックスを基盤においてジェンダーの問題をとらえるというこうした発想は、中高年以上の男性にはより身体に染み付いたかたちで見出すことができるからだ。現代社会が男性主導社会であるがゆえに、そこから排除されてきた女性たちにはジェンダーのはらむ問題性は、より認識しやすいと考えられる。しかし、男性社会の担い手である男性たちにとっては、ジェンダー構造とそれに支えられた「常識」にドップリつかっているだけに、この問題は、はるかに見えにくい状況が作り出されているのである。

こうしたジェンダー問題に対する男性の「鈍感さ」にどう亀裂を入れ、これが単に「女性(だけにかかわる)問題」ではなく、自分たちの生きる社会において重要な課題であることに「気づき」、この問題について深く「認識」させ、その上で、男女共同参画社会に向けて「体験」や「行動」を生み出すことが、男性対象のセミナーにおいては、問われなければならない。

男性セミナーの実際

しかし、男性たちもまたこのジェンダー化された社会の問題点に少しずつではあるが気が付き始めている。男性たちも、最近、自分たち男性が、この男性中心社会で、ほんとうに「人間らしい」「「豊かな」人生を送っているのかについて、不安とも不満ともつかない思いを抱き始めているからだ。「仕事中心の生活は、過労死や単身赴任の悩みを生み、家族とのコミュニケーションもままならない。しかも、働いた末に、自分たちを待っているのが定年離婚やよくても濡れ落ち葉の老後ではたまらない。」そんな声も広がりつつある。若い男性のなかには、同世代の女性たちの勢いのよさに比べて、自分たちの傷つきやすさや女性とのコミュニケーションがうまくできないという悩み、結婚難などの課題も登場しつつある。男たちの間にも、自分たちの生活スタイルを問い返し、もう少し自由で人間的なライフスタイルへ転換したいという気持ちが渦巻きつつあるのだ。

こうした動きに対応するかのように、一九九四年、五年頃から、各地で男性を対象とするセミナーが急増し始めているのは、冒頭で述べた通りである。

筆者自身、「男性学」「男性研究」者として、あちこちで開催される男性対象セミナーの講師を行ってきた。筆者が赴いた地域をいくつかあげれば、府県レベルの主催では、青森県、宮城県、埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県、長野県、福井県、富山県、愛知県、三重県、和歌山県、滋賀県、京都府、大阪府、奈良県、兵庫県、広島県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、高知県、佐賀県、宮城県、長崎県などが、また市町村レベルでは、比較的大規模な都市だけあげても、仙台市、静岡市、長野市、富山市、瀬戸市、岐阜市、大津市、京都市、大阪市、奈良市、神戸市、岡山市、高松市、福岡市、北九州市、久留米市、熊本市などで、男性問題をテーマとした講演会やセミナー・連続講座を開催している。さらに、食品連合などをはじめとする企業組合連合や企業組合、関西および中国地方生産性本部など、単発ではあるが主に男性対象の男性問題講演会を開催している諸団体もある。また、自治体の職員研修や教職員研修などで男性問題や男性学の講演の依頼も急速に増加している。

以下、こうした場で行われている主に男性対象のセミナーについて、いくつかの事例に基づく報告を行ってみたい。

事例1　滋賀県「男性学講座」(滋賀県立婦人教育センター/本年度より「滋賀県立女性センター」と改称)

おそらく関西地域で最初に「男性学講座」と銘打った男性対象のジェンダー関連講座になるだろう。当初から、県内の男性職員研修をかねるかたちで行われ、修了者には修了証明書を授与するかたちで行われている(研修ということで、時間的に、ウイークデーの昼間の場合もある)。また、講座のプログラムには、公開講座も含まれ、女性の参加がある場合もある。理論を軸にした基礎講座と料理実習などの応用講座の2段階で運営されていた時期もあり、参加した男性職員の間では、修了したことが、ある種の「名誉」になっているという話を、担当者から聞いたこともある。

講座の終了後には、講師をかこんで食事をしながらざっくばらんな会話の時間を設ける場合もあり、講師が参加者の忌憚のない生の声を聞くチャンスになっている。

講座における講演要旨が、毎年、冊子のかたちでまとめられているのも、この講座の財産になっていると思う。

事例2　花婿講座(日本青年館)

日本の男性対象セミナーのはしりの講座のひとつ。当初は男性のみだったが、近年は、男女を対象としている。ウイークデーの夜間に開催されている。20代から30代の若い男女が主な参加者である。

資料1は、この講座で筆者が話した後の参加者の感想である。

この講座の参加のなかで印象深かったのは、参加した男性から「もし<男らしさ>が無くなったら、ぼくはどうなるんですか」という声があったことだ。参加した女性の間からは、「自分らしく生きればいい」という声があったが、この当然の反応が、質問をした男性には理解できなかったようだ。実は、ここに、男性対象のジェンダー講座のむずかしさが潜んでいるように筆者は感じた。もちろん、完全に<男らしさ>が消失した状態は、少なくとも現状では不可能である。しかし、抽象的なレベルでジェンダー・フリーを語られると、男性の多くは、自分のアイデンティティの重要な一部である<男らしさ>が全く無くなることに、一種の恐怖を感じるようなのだ。ジェンダー・フリーの問題を、「過程」「歴史的変化」の問題としてとらえることができず、すぐに究極のジェンダー・フリー状況を頭の中で想像し、そこに自分の現状とはかけはなれた状況を連想して、自分のアイデンティティのあやうさを感じるという傾向が、この男性に限らず、男性には多いように思う。事態がつねに生成の状況にあり、自分たちは、この変化する状況に対応して、自分なりの変身をとげる必要がある、ということが、観念的かつ固定的・抽象的思考に慣れた男性にはもっとも理解しにくいことなのかもしれない。

＜資料1＞

●花婿学校（1996年）

数年前までだったら、今日の話は反発していたと思う。なぜならずっと仕事人間だったからだ。両親からも、上司からも、男は仕事だと言われ続け、自分自身もそうだと思ってきた。でも転職を機に仕事の質がすごく落ちた。その時は自分の力はこんなものではないと思い、当時の上司とはすごく折り合いが悪くなった。でもこんな時だからこそアフター5を充実したいと思い、点字タイピングを始めた。それがきっかけで障害を持った方々と出会い、それがまた輪を広げていった。その時自分にとって仕事は何だろうとずっと考えた。今でも考えている。(♂)

「男性社会」の中で追いつめられている（自分で自分を追いつめてしまう）男性の一生を理解する上で、とても参考になるお話だったと思います。学生時代には気づきませんでしたが、社会の中では、男性の行動、思考というものが私たち女性にとっては大変不合理、不自然と思われることが多々あるのは事実です。……男の人って気の毒だなあと思います。(♀)

女、若い、未婚とくれば見下して当然という態度の男性と話をした後、胃が痛んで一晩ねむれなかったこともある。仕事を持った頃に、父に腹立ちをまとめてぶつけたことがある。母親を14歳で亡くして子供の頃から働いて苦労した父は、新潟生まれの樺太育ちという、私の想像できない人生だった。北国の人に共通の無口で、あまり話もしなかった。その時は支えの信仰から答えてくれたが、その後お酒を飲んで泣いているようだった。若さと、人間として扱われないというショックから、被害者意識ばかりで父にあたってしまったが、今、父が生きていてくれたらなあと涙が流れる。もう少し冷静に対等に話し合えただろうに……。もう少し、父の立場もわかっただろうに……。(♀)

事例3　男性センター(三重県女性センター)

主に土曜の午後開催。参加者は40代から60代の男女。仕事をもっている40代の男性も多い。筆者が毎回担当しているのは、男性セミナーとともに、平行して行われている女性セミナーとの合同の講演会とワークショップである。これまで別々に学習してきた男女を一同に集めて、講師(筆者)の講演の後、昼食、その後、男女入り交じって、「男が得か女が得か」「男らしさ・女らしさとは」「職場の男女問題」といったテーマを選んでディスカッションを行い、その結果を、全体会で報告するという形態をとっている。

この方式の面白い点は、参加者の男女が、こうしたテーマについて、異性との間でほとんど会話をしたことがないと

いうことがあらわになることである。「こんな話、妻としたこともない」とか「男の人の気持ちがなんだか初めて理解できた」という声が、毎回出される。現実に、家庭でも職場でも地域でも、男女がジェンダーの問題についてフランクに話し合うという機会が日常生活においては、ほとんどない。実は、こうした問題を語り合うことで、男性と女性の相互の誤解が、ある程度解消する可能性はつねにあるのに、こうしたチャンスが、現在の日本に暮らす男女にはほとんど与えられていないのである。

ジェンダー問題をめぐる男女のフランクなコミュニケーションの場の設定は、想像する以上に、新しい発見と気づきを男性（そして女性）に与える可能性があると思われる。その意味で、簡単で、かつ効果のある方法といえるだろう。この発見は、筆者も参加しているメンズ・リブ研究会での男性版ＣＲの体験を想起させられた（伊藤公雄『男性学入門』参照）。

事例4　男性セミナー(箕面市南公民館)

ウィークデーの夜に行われた。参加者は、20代の学生から60代の男性。定年後の方も三分の一程度いた。毎週１回の連続講座で６回ほど。講演とディスカッションの形式で進行した。地域の公民館の企画にもかかわらず、30人程度の参加者があった。

講座終了後、毎回、コミュニケーション・カードに感想や意見などを記入してもらい、それを次週、まとめて参加者に提供するという工夫が行われていた。こうすると、他の参加者が何を考えているのかが共有でき、また講師の側にも、何が問題点なのかが把握しやすい。

資料2は、このセミナー終了後の感想の一部である。

＜資料２＞

●中高年男性向け＜男性学＞講座（1996年）

今回の講座を受講して男女をめぐる意識のずれを認識し「男性学入門」のような講座が広く普及し、高齢化社会に対処できるような男性がより多く誕生するようになれば、この講座の意義があると考えます。（♂）

今までの生き方（仕事中心、男の存在価値）を問い直す機会に巡り会えた。恐らく意識を変えるとは何かの行動を起こすことなのだろう。でも裸になれば感冒になる。（♂）

わが家では共稼ぎが長かったので、自分としてはお互いに協力し合って来たので、今の話の中身では良い夫婦関係であった様に思う。高齢になって来たので、これからも健康な家庭を続けたいと思います。（♂）

最近男性が女性に押されっぱなしです。威張りっぱなしか、甘えっぱなしか両極端の男性も多くなっています。男性も自立と言いながら、やっぱり自立できなかったなという感じです。ネットワークを作っていきたい。（♂）

先生のお話、約半分は納得できます。残り半分は時流におもねると言うか、進歩的な考え方の人達が納得できる話の進め方をされているように思う。今後の展開が楽しみ。いずれにしても男性が、女に精一杯尽くして老後濡れ落ち葉では余りに淋しい。これを機会に自立できる為にできることから始めよう。（♂）

男性学を開き、確かに納得もし、分かってもいることであるが、今聞くのでなく10年前、20年前に聞きたかった問題である。（♂）

男性学という学問があるとは驚いた。いままで深く考えたこともなかったので、わが身をふり返ると不安を感じた。（♂）

事例5　男性講座(高知県勤労部)

高知県の労働部門の主催。女性の社会参画を進めるために、男性の家庭参加を促進させようというのが目的だった。ウィークデーの夜で参加者は、数名の女性を除いて、男性30人ほど。働いている人がほとんどだった。

この企画の特徴は、講座を単に講演などの知識や情報提供型のものにとどめず、男性にとって実用的な講座を組み込むことで、男性に「魅力的」な講座にしようとしている点にあったと思う。内容も、料理講座などよくある実習以外に、インターネット講習や家庭救護訓練実習など、「役にたつ」というイメージのものを含んでいた。　筆者の講演後の参加者との懇談でも、「実習（特にコンピュータと家庭救護）があったから来た」という人が何人かいたのが印象的だった。しかし、実習に関心のある人も、ジェンダー問題についての講義もよく聞いていたようで、問題を理解した上で自分なりの意見表明をする人も目立った。

事例6　男性学への招待(大阪市立婦人会館)

おそらく、日本で初の社会教育の場での通年の男性学講座だろう。ウィークデーの夜、参加者は、40代、50代を中心に、当初、定員40人に80人の応募があった。一年間の長丁場にもかかわらず、最後まで継続した人が20人以上いた（これは、同じ時間に並行して行われていた女性対象の例年の講座に比べても、はるかに「歩留まり」のいい数である）。プログラムは、資料3に示してある。

長い講座だったこともあり、筆者もいろいろな体験をした。

この「男性学への招待」のプログラムを進めるなかで、講座開始半年後くらいの段階で、四回ほど「男の自己表現トレーニング」というのをやってみた。これが、たいへん面白かった。また、参加した男性たちにとっても、楽しかったようだ。方法は簡単なものだ。まず、事前に担当を決めて、一人10分、「自分の今の思い」というタイトルでしゃべってもらい、続いて他の参加者からの質疑応答を五分ほど行うという形で進めていった。

「男性の場合、一般的なことがらや仕事についてはスラスラしゃべれても、自分の思いといったことをしゃべるのはにがてなのではないか」という予想があった。そこで「自分の思い」という課題を設定したのである。しかし、結果は、参加者自体がもともとそうした素質をもっていた人が多かったのか、それともそれまでの半年ほどの講座の成果があったのか、それぞれ個性的で興味深い発表になった。

猛烈な仕事人間としてバリバリやっているうちに心臓をやられ入院してしまった生命保険会社に務める男性は、入院中に感じた焦りや不安などについて話してくれた。ベッドのなかで、「このままでいいんだろうか」という思いがわき、退院後は、自分なりの趣味を発見し、現在は、リハビリの一方で比較的ゆったりした職場に移って仕事を続けているという。仕事柄、女性の多い職場でのエピソードなどもまじえた興味深い話になった。他にも、参加者のなかには、この講座を受けるきっかけとして、過労による入院体験があったという人が何人かいた。

その他にも、「このままでは定年離婚確実だったが、この講座に参加したことで、いろいろ考え工夫することで、現在では夫婦関係も家族関係も、かなりスムーズに進むようなった」と語る50代の人。50代に入って、第二の人生設計にシナリオ・ライターを志し、講座の話をヒントに書いた脚本が、現実にテレビドラマ化されそうになっていると話す人。「この講座に参加して、女性とのコミュニケーションがすごくうまくいくようになった」という人もいた。長い間の単身赴任ですっかり生活面で自立している人や、障害をもつ娘さんと妻と三人で暮らす自分の生活を明るく語る人などなど･･･。

30人ほどの男たちが、何週間かにわたって交互に話す個々人の「思い」を、それぞれの参加者が素直に受け止め、時には批判したり、あるいはアドバイスしたりしあった。批判といっても、口論になったりすることはまったくなく、ほんとに率直なコミュニケーションがなされたのも印象的だった。

この「自己表現トレーニング」をきっかけに、それまでも比較的スムーズに進んで来た参加者間のコミュニケーションが、急速に深まっていたようにぼくには思われる。

しかし、女性の講師が、女性差別問題について語った講義では、何人かの男性からかなりきつい反論が出された。関心が強かったのは、労働の問題（長時間労働）と、ライフプラン作りなど、自分の生活にかかわる講義やワークショップが目立った。

さらに、講座終了後、参加者を中心に「おとこ倶楽部」と称したグループが形成され、月に一度、自主的に例会を継続しているのも、この講座の特徴だろう。

＜資料３＞

「男性学への招待―新しきライフスタイルを求めて」プログラム　大阪市立婦人会館（95年５月～96年３月）

第１回　ガイダンス「男性学とは―企業社会と男性社会」
第２回　私にとっての「男性問題」（参加者自己紹介）
第３回　男性問題と女性問題
第４回　男のセクシャリティ―水野阿修羅
第５回　企業社会からの脱出―味沢道明
第６回　男と暴力―安部達彦
第７回　男にとって“家族”とは―中村彰
第８回　料理の哲人は私だ！（料理実習）
第９回　グループワークに向けて
第10回　グループワーク
第11回　夏期課題の製本作業と交流会
第12回　男の自己表現トレーニング(1)
第13回　男性と企業社会について―東京管理職ユニオン・設楽清嗣
第14回　女性労働の過去・現在・未来―金谷千慧子
第15回　男の自己表現トレーニング(2)
第16回　男の自己表現トレーニング(3)
第17回　男性の働き方、現在と未来―西谷敏
第18回　男の自己表現トレーニング(4)
第19回　グループワーク（課外作成について）
第20回　話し合い（企業社会と男の生き方）
第21回　高齢社会と男性社会―上野谷加代子
第22回　私から見た“日本の男と女の関係”　外国人講師
第23回　まとめ（新しき男の生き方を探る）
第24回　グループワーク（私たちの提案）
第25回　“21世紀を生きる男性”に贈るパスポート
第26回　「男性学への招待」プログラムづくり
第27回　プログラム製本作業、交流会
第28回　プログラム発表とコメント(1)
第29回　プログラム発表とコメント(2)
第30回　「男性問題セミナー」「女性問題セミナー」合同閉会式

（講師名のないものは、講師＝伊藤公雄）

男性対象の女性学・ジェンダー研究・男性学のプログラム企画

以上、いくつかの具体例をあげてみてきた。ここで、これらの経験のなかから、男性を対象とした女性学・ジェンダー研究・男性学のプログラムと方法について考えてみよう。まずプログラムの企画段階での課題である。これまでも述べてきたように、多くの男性たちにとって、ジェンダー問題は、まだまだ「他人事」「女性(だけに関連する)の問題」でしかない。それゆえ、講座やセミナーに目を向けさせるためにも、この問題が、「女性(だけに関連する)問題」ではなく、男性自身とも深くかかわる問題であることに気づかせる工夫が必要になる。

「男性学」や「男性セミナー」「花婿学校」といった、「男性」を表に打ち出した企画がある程度男性を引き付けているのは、そのためだろう。これまで述べてきたように、男性の間にも、ジェンダーをめぐる問題が浮上しているのだが、男性たちが固着している＜男らしさ＞の鎧は、彼らの間に、「女性問題」の講座に足を向けることを潔しとしない雰囲気を作り出しているのは、残念ながら明らかだからである。また、女性ばかり居る場所に出掛けると、孤立してしまうのではないか、という思いも強いだろう。「男性」を表に出すことで、「同じような思いを抱いている同性の人たちと一緒に話が聞ける」という雰囲気を作り出す必要がある。

実際、男性たちに、「ジェンダー問題は男性問題でもあり、男性性の縛りによって男性も多くの被害を受けている」ということをきちんと提示した場合、男性たちは、この問題に強く反応するというデータもある(1996年愛知淑徳大学の女性学関連科目受講学生意識調査による)。しかし、その場合、男性の被害者性に関する反応は強いが、女性のはらんでいる問題については、受講していない男子学生とあまり変わらない問題意識しか残っていないという調査結果も出されている。このへんの問題は、さらに深く分析していくことが必要だろう。

また、夫婦関係に焦点を置くテーマ設定も、男性たちの関心をひくようだ。特に、50代くらいの定年前世代は、老後の夫婦関係に悩み始めている男性も多い。その場合、男性のみの講座設定と夫婦で参加の方式の使い分けの工夫もする必要がある。女性対象のジェンダー関連講座の最後に、「夫婦関係」を扱った講演やワークショップを入れ、「できるだけご夫婦でどうぞ」というアナウンスメントをするなどという方法もあるだろう。

定年後の生活自立をめぐるテーマも、現実には50代以後の世代には関心が強いようだ。ベターホーム協会が、昨年企画した男性向け料理講習会は、四回開催でのべ2000人の申し込みがあったという。自治体の男性向けセミナーでも、こうした生活自立に向けた講座を組み入れるところが多く、かなり成功しているところもあるようだ。さらに、介護などの実習を取り入れるのもひとつの工夫だろう。

すでに高知県の事例でふれたように、コンピューター講座や救急対策講座など、他にも生活にかかわる実用的な企画も可能だろう。こうした実用的な講座は、ジェンダーに関心がない(あるいはメンツから関心のないふりをしている)男性にも入りやすいという利点もある。ただし、単に実用的な知識の提供で終わるのではなく、女性学・ジェンダー研究・男性学にかかわる講演やワークショップと連動させることで、より意義が深まることだろうと思う。

既婚の若い男性を対象としたセミナーでは、「子育て」をテーマとして設定するケースも増えている。特に、ここ数年、男性の既婚者のなかに育児に関心をもち始めている人が増えており、父親講座などでも、けっこう男性が参加するようになっている。育児という体験を通じて、女性学・ジェンダー研究・男性学に関心をもってもらうというのも、ひとつの重要なチャンス提供といえるだろう。

未婚の若い男性を対象としたセミナーは、大学などでの授業を除けば、これまで未開拓の領域だったといえるかもしれない。しかし、今後は、次代を担う若い世代を対象とした、社会教育における女性学・ジェンダー研究・男性学の必要性はますます問われることだろう。文部省も、青年男女の男女共同参画セミナーを、1996年度より実施しており、さまざまな実験的事業が行われつつある。しかし、生活体験・社会経験の少ない青年、特に男性を対象とした企画は、かなりの困難を生み出しているようだ。ともすれば「私」中心に傾きやすい世代に、社会問題としてのジェンダーについて深く認識をさせるために、若い世代のニーズを探るとともに、若い世代自身による企画立案やワークショップの実施など、主体的な参加・発見型の企画が今後ますます必要になるだろう。

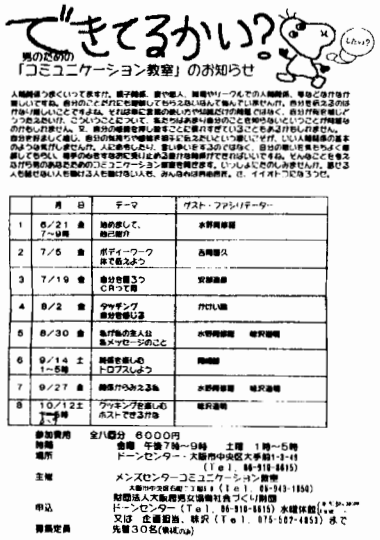
男性対象セミナーの実施の場合、最大のネックとなるのは時間の設定である。仕事をもつ男性を対象にする場合、ウィークデーなら夜間を設定せざるをえない。土日などの休日を利用する場合もあるが、男性たちは参加しにくいというケースもあるようだ。家族もちの場合、夫婦参加や子どもを巻き込んだ形をとると、土日でもうまくいく場合を経験したことがある。

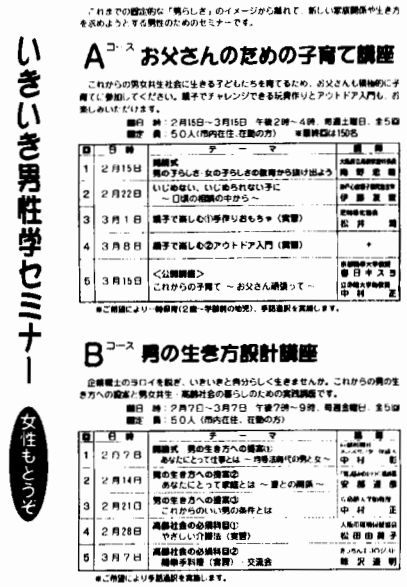
また、仕事をもった男性の場合、セミナーの場所が、職場の近くがいいのか、それとも居住地域がいいのかという問題もある。これまでの筆者の経験からいえば、中高年男性の場合は、職場の近くの方が参加しやすいように思う。職場からの帰りにちょっと参加という形である。一旦帰宅してしまうと出にくくなるということとともに、居住地域では知りあいと出会うのが恥ずかしいという人もいた。もっとも、若いお父さんを対象にした子育て講座などでは父親同士の情報交換や親睦も目的としている場合もあり、むしろ居住

地域の方が向いているとも考えられる。いずれにしても、実施場所の特色にあわせた企画が必要になる。

資料として、各地の男性対象セミナーの事例をいくつか紹介してみた(資料4)。また、これらの事例を参考に、ごく個人的なプログラムの例を作ってみた(資料5)ので、参照していただきたいと思う。

＜資料４＞





＜資料５＞

男性対象プログラムの例

「とまどい始めたあなたのための男性学への招待」

タイトル	内　容
1.男性学入門	現代社会で男性がかかえている諸問題について、ジェンダーの視点から具体的に語る
2.どこが違う男と女	セックスとジェンダー、文化的・歴史的構成物としてのジェンダーについて考えさせる
3.男性自立度チェック	ロールプレイ、男性自立度チェックと自己紹介など、ワークショップを軸にコミュニケーション
4.男にとっての家庭・家族	男女の夫婦関係のスレ違いを軸に、男女関係のあり方を探る
5.過労死社会を考える	現代日本の長時間労働や雇用形態の問題点を論じることで、働き方を考えてもらう
6.何がセクハラか	セクシャルハラスメント問題を軸に、女性労働の現場における問題点を理解してもらう
7.男の料理教室	簡単な手料理を作る。自分で作ったものを、お酒を飲みながら食べる
8.女たちは今何を要求しているか	フェミニズムや日本の女性問題の概要について知識を提供する
9.父親論入門	男らしさの鎧の形成と父親、男の子育ての重要性について考えてもらう
10.男女共同参画社会の可能性	少子化・高齢化・国際化のなかでの男女共同参画社会の必要性について（自分たちで具体的なプランを作ってもらうのもいいだろう）

男性対象講座の方法をめぐって

次に、実施の方法についてみてみよう。

すでに述べてきたように、男性にとって女性学・ジェンダー研究というテーマ設定は、それ自体で反発を生み出してしまう場合も多い。くりかえすが、この問題が、自分たちの問題でもあるということを気づかせ、そこから現代社会のジェンダー問題についての認識を深めさせていくような回路設定が必要だろう。

方法としては、講義形式のものとともに、参加・発見型のワークショップ形式を取り入れることが有効だろう。

「気づき」のレベルでは、ロールプレイなどによる「男女の役割逆転の世界の提示」や、深沢純子さんの開発した雑誌を使ったジェンダー分析(具体的な方法については、国立婦人教育会館編『社会教育における女性学教育/学習の内容と方法』、メンズセンター編『男たちの「私」さがし』など参照)なども、入門編としては有効性が高い。特に、雑誌の分析は、自分たちで共同作業し、意見を交換しながらジェンダー構造の問題点がわかりやすく発見できるため、

最初ないし二回目くらいの初期段階で行うと効果的だった。

また、ある程度、講座が進行した段階で、メンズ・リブ研究会で経験したＣＲ型の男性同士の話し合いや大阪市婦人会館でのミニ講演と質問の方式を取り入れることも、こわばった男性の意識を開放的にするためにきわめて有効だったと思う。

また、三重県女性センターのように、男女混合でのテーマを設定しての話し合い(「男が得か女が得か」「〈男らしさ〉とは何か」など)も、男性・女性の双方に思わぬ発見をもたらした。

さらに、資料6の「男の自立度チェック表」などの活用も、男性同士の自己認識という点で、なかなか面白いコミュニケーションを生み出すだろう（定年後の男性などは生活レベルでの自立度の高い人も多いので、「これはあくまで初級編です」とつけくわえることも多い)。

男性対象講座で、何よりも気を使うのは、男性たちが<男らしさ>の鎧に縛られているためか、コミュニケーションのレベルで、なかなか自分をうまく表現できないという点である。また、力関係や上下関係にこだわる男性の意識に留意する必要もある。そのため、「押し付け」を感じさせないようにし、会話などでは、できるだけ平場で(職業などについての自己紹介は最初は避ける)対等なコミュニケーションを心掛けるようにすることも必要なケースがある。また、講座の場合、最初から女性問題を女性が語るという形は避け、男性に語らせるという形が効果的なこともある。女性に女性問題で講演を受けることそれ自体に反発する男性も多いからである。しかし、連続講座の場合には、必ず女性講師の講演やワークショップを入れなければならない。結果として、男性側の被害者意識を生み出すだけのジェンダーの講座では、意味がない。(ある程度参加者がなじんだ段階以後であれば、女性講師への反発があってもいい。反発が逆に、男性の意識をあぶり出す効果もあるからだ)。

講座を通じてジェンダー問題についての認識を深めてもらう場合、もっとも注意すべきは、男性が抱いて入る生物学的性差とジェンダーの混同を解きほぐすということだろう。筆者が行った講義形式のもので、ある程度男性の固定的なジェンダー意識にヒビを入れることができたと思っているのは、マーガレット・ミードの文化人類学的な実証研究や、ルイス・フロイスの戦国時代の日本の女性とヨーロッパの女性を比較したもの、さらに、バダンテールなどによる「母性愛」概念が近代の産物であるといった視点などであった（伊藤『男性学入門』参照)。

よく出てくる質問には、「男が狩りに出て、女は家を守るのが原始時代からの人間の生活だ」というのがある。こうした声には、「広い世界には、女性が狩りに出掛ける文化も現在確認されている。もし、あなたが言うように、男性だけが狩りに行ったと仮定して、彼らが確保できる食料は食料自給率のどれくらいだと思うか。約30%でしかない、という計算がある。残りは、女性が確保していたのだ。原始時代でも女性の労働がなければ人間は生きていけなかった」という反論を行うことが多い。また、「サルもメスが子育てをする。人間も動物だから、メスが子育てをするのが当然だ」と行った質問には、「そんなにサルの生活がいいなら、サルの生活にもどったらどうですか。人間は長い歴史のなかで、文化を生み出してきたし、今、人間文化は男女対等の方向に向かって作られてきているのではないですか」といった回答をすることにしている。

さらに、「育児の担い手が女性だけになったのは戦後になってからだ」、「母親だけの育児は子どもにとって悪影響を与える。複数の大人との接触が子どもには必要だ」「男性にとって育児は人間性の幅をひろげるチャンスだ」といった育児をめぐるテーマについても、おおむね反応はよかったと思う。

また、「男女の機械的平等」論のあやまちを理解させることも重要だ。「女性差別の解消をいうけれど、結果的に男性が苦しむことになる」とか「女性問題の解決を主張されることで女性が優遇され、逆差別を生む」という声には、「現状が差別状況をはらんでいるので、女性に対する特別措置を行うのは、差別の解消であり、逆差別ではない」という視点からの反論が必要である。

特に、女性がもつ妊娠・出産の機能をめぐる問題は、うまく説明する必要がある。「女性には妊娠・出産の機能があるから、社会参加は控えるべきだ」という発想が男性には根強いからだ。「男女対等の社会参画の実現のためには、女性がもつ妊娠・出産の機能を社会的に保護し、同時に、女性がこうした機能をもつことを口実に差別や排除をすることを無くすべきだ。これが男女共同参画社会の基盤になる発想だ」ということを、具体例をあげながらうまく説明する必要がある。

その場合、現在の日本社会における重要問題である少子化・高齢化を例にするのも有効性いいかもしれない。「少子化・高齢化は福祉の高負担と労働力不足を生む。これに対応するためにも、女性の社会参加が必要だ。しかし、現状の男女の大幅な賃金格差や昇進差別があれば、女性は働こうとはしないだろうし、また現状の家事・育児・介護が一方的に女性の肩に背負われている状況では、社会参加も困難だし出産する意欲もわかないだろう。男女共同参画社会の実現なしには日本の未来は暗い」といった、大状況の話をすると、男性にも、うまく理解してもらえるケースがある。

同様に、日本のセクシャルハラスメントが国際的に問題になっているとか、さまざまな国際比較のデータなどで、

日本の状況の問題点を指摘することも、有効性があるように思う。また、外国人にしゃべってもらうのも、効果的なことがある（逆に、外国人に日本の悪口を言われたと反発する男性もいるので、ちょっと工夫が必要だ）。夫婦関係についての固定的発想(「夫婦関係は個人と個人の関係ではない」といいた発想など)を転換させることも重要だ。夫婦別姓問題などをとりあげると、この一体感幻想からの反発は強い。また、家事労働評価についても、「家事労働は大切な労働。専業主婦をバカにしてはいけない」などという男性もいる。こうした人には、「人間にとって大切な労働だからこそ男性も担うべきだ」と答えるようにしている。

具体的に家事・育児・介護などの体験も、新たなきづきを生み出すチャンスである。すでにふれた料理講座や介護実習、家庭救護実習なども、男性の意識変革のチャンスとして有効だろう。

また、男性の堅い心と体をときほぐすようなワークショップの開発（「男性コミュニケーション講座」「パフォーマンス講座」など）も、今後必要になるだろう。

すでに「気づき」のレベルでもふれた男性によるコミュニケーションの場作りも、男性の心と体をときほぐすのにきわめて重要な「体験」になるだろう。

＜資料６＞

男の自立度チェック

●まずは、男性は自分を、女性は身近な男を点検してみてください

＜生活の基本テクニック篇＞

1 ひとりで夕食の材料を揃えられる。
2 お米の値段を知っている。
3 ご飯が炊ける。
4 テキストなしで作れる料理が５種類はある。
5 食後のあとかたづけをする。
6 電気掃除機が使える。
7 洗濯機を使ったことがある。
8 風呂場の掃除をしたことがある。
9 アイロンを使ったことがある。
10 簡単なボタン付けができる。
11 ゴミの収集日を知っている。
12 自分の背広・ネクタイ・靴下・下着が、どこにあるかわかる。
13 自分の服は自分で買う
14 健康保険証やハンコがどこにあるかわかる。
15 ガス・水道・電気・電話料金の振り込みができる。
16 地域の図書館・公民館の開館時間を知っている。
17 役所への諸届けはひととおりできる。
18 地域で問題になっていることをひとつ挙げられる。
19 自治会などの回覧は必ず読む。
20 選挙では各候補の公約を熱心に比較する。

＜妻や子供との関係篇＞

1 妻が外出して遅くなってもイヤミを言わない。
2 妻が長い間、家を留守にしても不便を感じない。
3 妻の交遊範囲を、根ほり葉ほり聞き出さない。
4 妻の友人たちと気楽に会話が楽しめる。
5 妻の紹介する男性と友人になれる。
6 夫婦の会話が、１日30分以上ある。
7 夫婦喧嘩をしても、自分から折れることができる。
8 妻が病気で寝込んだら、会社を休んで家事をする。
9 子供の友達の名前を、３名以上知っている。
10 子育てについて、筋の通った考えを持っている。
11 子供に何かを教えてもらったことがある。
12 子供の相談には真面目に耳を貸す。
13 自分の仕事姿を子供に見せたい、と思う。
14 老後は、子供には頼らないつもりだ。

●採点はＹＥＳの合計点●

＜生活の基本テクニック篇＞

★０～５点……「産業廃棄物」「粗大ゴミ」直行型。
自立心のなさでは“生きてる化石”級。生活態度を改めないと、いつか後悔の日々が。

★６～10点……「キミ作る人、ボク食べる人」脱出途上型。
「自立なきライフスタイル」からの脱却へ、あともうひとがんばり。

★11～15点……「21世紀順応活き活き」型。
21世紀の結婚・共同生活の資格は十分です。しかし生活の自立は、まずは第一歩です。次には精神的自立をめざしましょう。

＜妻子との関係篇＞

★０～３点……「恐怖のトッチャンボウヤ」型。
はっきりいって、妻を道具としてしか考えていない。

★４～８点……「よき夫にして、よきパパ」型。
家庭的な人ですが、精神的自立まであともう少し。

★９点以上……「21世紀順応自立した夫」型。
きっと幸せな老後がまっているでしょう。

（神奈川県県民部文化室「かもめ92号」1988.「DIME」1988.11.3を参照して作成）

おわりに　男性問題は女性問題?

本稿の冒頭で、「女性問題は男性問題」という視点につい

てふれた。ところが、最近、講演などで、最後に「男性問題は女性問題だ」というのをつけくわえさせてもらうことが多い。いうまでもなく、このスローガンも、狭義の男性問題と女性問題とを裏表の関係におこうというわけではない。ジェンダー問題としての男性問題の解決のためには、女性(たちの自立と社会参加に向けた動きの拡大が必要であり、女性たちの意識変革、生活スタイルの変革)が問題になる、ということだ。従来のように女性たちが男性に経済的に依存する状況が続けば、男性たちも「家族のため」と、命をすりへらして長時間労働に励まなければならない。男性たちが、<男らしさ>の鎧から脱出し、人間性を取り戻し、より豊かな人生を送るためには、女性の経済的自立が重要な課題になる。また、男性主導社会は、これまで社会の荷物を全面的に男性に背負わせてきた。こうした状況から、よりゆとりをもった自由時間を男性が確保するためには、女性に男性が担ってきた役割を分担してもらう必要がある。いわば、女性の自立と社会参加の拡大は、これまで<男らしさ>に押し潰されて苦しんできた男性が、より人間らしい生活を確保するための前提条件でもあるというわけだ。

男性、女性がゆとりをもって仕事をし、同時に対等な家庭参加が保証され、対等な責任の分担とその成果の対等な享受が可能になる社会、それは男性にとっても「悪い話」ではないのだ。こうした視点は、まだまだ「絵にかいた餅」に見えるかもしれない。しかし、女性問題を男性自身の生き方とつなげて考えてもらうには、こうした観点もまた、今後は強調される必要があるのではないだろうか。

以上、男性を対象にした女性学・ジェンダー研究・男性学の講座をめぐって、さまざまな問題について述べてきた。男性対象の講座自体まだまだ開始されたばかりであり、今後ともさまざまなプログラム開発と方法の研究を発展させていかなければならない。本稿が、こうした動きに、すこしでもお役にたてば幸いである。

（大阪大学　教授）

注

本研究は、国立婦人教育会館の研究事業「社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究」の成果の一部である。筆者は、この調査研究において、社会教育における女性学教育についての研究とともに、男性対象のセミナーのもちかたや、今後重要な意味をもつことになる男性学や男性研究についての研究を分担した。なお、この調査研究全体の成果は、国立婦人教育会館編『女性学教育／学習ハンドブックージェンダー平等な社会をめざして』（有斐閣、1997年）として出版刊行される予定である。

また、本稿は、国立婦人教育会館編『社会教育における女性学教育の内容と方法』（1997年）にすでに掲載された拙稿に大幅に加筆・修正を加えたものである。

参考文献

足立区女性総合センター編『男性改造講座』、ドメス出版、1993年。

伊藤公雄　『<男らしさ>のゆくえ』、新曜社、1993年。

伊藤公雄　『男性学入門』、作品社、1996年。

上村悦子「大阪で大盛況男性リストラ講座って何だ」『婦人公論』、1994年6月号。

国立婦人教育会館編『社会教育における女性学教育/学習の内容と方法』、1997年。

滋賀県婦人センター編『男性学講座記録集(1989年~1997年)』。

中村彰　『全力疾走した男たち』、近代文芸社、1996年。

中村正　『「男らしさ」からの自由』、かもがわ書房、1996年。

日本青年館『花婿講座』、三省堂、1990年。

メンズ・センター編　『「男らしさ」から「自分らしさ」へ』、かもがわ書房、1996年。

メンズ・センター編　『男たちの「私」さがし』、かもがわ書房、1997年。

福岡市女性センター　アミカス編『平成七年度　男性問題講座実施状況報告書』、1995年。